

令和6年度 学校自己評価システムシート (東邦音楽大学附属東邦第二高等学校)

目指す学校像	・音楽芸術の一貫教育を通じ、情豊かな人格の形成を目指す
本年度の重点目標	1.新学習指導要領に基づいた、学力の育成と充実を図る(音楽教科・科目及び普通教科の学びを通して、『知識・技能』の習得、『思考力・判断力・表現力等』の育成、『学びに向かう力・人間性等』を養う)→主体的・対話的で深い学びへと繋げる 2.豊かな人間性の涵養(①各専攻実技を軸とし、他教科・科目の学習を通して豊かな感性を醸成する ②全教育課程を通して、人權教育を推進し、他者と協働を通じ、豊かなコミュニケーション力を育む) 3.基本的生活習慣の確立と充実(社会生活・活動の基本となる挨拶礼法、時間の自己管理等)

年度目標		年度評価					
領域	評価項目	現 状 と 課 題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
学 習 指 導	○・新学習指導要領に基づいた、学力の育成と充実を図る。 ○『知識・技能』の指導では、基礎学力の定着と充実を図る。 ①音楽活動を始め諸活動を推進していく上で、必要不可欠な基礎的な理論と基本的なスキルの習得には個々の生徒の状況を踏まえた指導を行う。 ②教科等横断的な学習を通じ思考力・判断力・表現力の育成を図る。特に、新指導要領での新設科目に於いてはその指導目標を理解し、指導計画を確立していく。 ○思考力・判断力・表現力等の育成(対話的で深い学びの実現に向けた授業改善) ①音楽を軸とした各教科・科目の学びを通して豊かな感性の育成を目標とする ②教育課程を通して、人權教育を推進し他者とともによりよく生きていく人間性を涵養する ○学びに向かい合う力、人間性の涵養(各教科・科目の特性を生かした形で、各授業に於いて『主体的な学び』を実施する)。同時に、各授業での生徒間の学習活動(協働)から積極的な他者を理解し、思いやる姿勢を育成する。	・音楽理論の基礎であり、全ての音楽科目の基本となる『楽典』は、一年次から段階を追って、学力の定着を確認しながらの指導を基本方針としている。しかし、実際、指導をしている過程で、次第に学力差が顕著になっていく現状が見受けられる。同じく、ソルフェージュ(聴音、新曲視聴)に於いても同ような傾向が見える。各専攻実技の基本的な演奏スキルと定着と表現力をより円滑に育成していくために、『楽典・ソルフェージュ』の学力を如何にして向上させていくかが、大きな課題となっている。 新学習指導要領の施行に伴い編成した新教育課程の教科・科目の普通科目、音楽科目の指導内容に関して再度、共通理解を図った。 観点別評価に関しては、①知識・技能 ②思考・表現・判断 ③主体的に学習に取り組む態度の中で、③の『主体的に学習に取り組む態度』を評価するにあたって、『粘り強い学習への取り組み』と『自らの学習の調整』をして、その結果、確実な学習がなされ、成果に結びつくことを評価することを、各教科・科目の特性に合わせて評価していくことを、各担当教員が検討を進めていく事とする。	・音楽科でのカリキュラムの内容を習得していく上で、『楽典・ソルフェージュ』の学力の定着と充実是不可欠と考える。その為に各指導担当教員が連携を取りつつ①生徒が苦手としている要素は何か、②そこには何か共通している傾向がないかを調査し、③①②の結果として、生徒達が効果的に基礎学力を身に付け、更にその力を充実させていけるよう指導計画の基に授業を進めていくこととする。 新教育課程では、教科・科目等の横断的な学習の指導が可能に組み立てられている。 例えば、『コミュニケーション英語Ⅰ、Ⅱ』では、『実践的な英語運用能力の育成』は勿論、次に、『英語を使って何を学んでいくか』がポイントになっている。検定教科書もそのスタンスで作成され、題材も、『環境問題』『IT』の具体的な運用『科学』『世界史』などが、題材となっている。更に、『論理・表現』では、上記の題材を生徒自身が考え、それを表現する英語運用力を習得していくことを科目目標としている。このように、生徒にとって将来必要となる『力』とは何かを視野に入れた、各教科・科目の担当者間で連携を取りつつ、学習指導方法の目標と方向性の検討は不可欠であると見られる。	・『ソルフェージュ』の学習においては、『グレード別授業』を通して、基礎的な力の養成は勿論、生徒個々の学力の向上が認められる。 その為、生徒のレベルに合った教材の作成と指導により、個々の学年の生徒の状況に準備・指導に時間がかかる場合がある可能性も否定できない。しかし、生徒に学習して身に付いた学習成果を感じさせながら継続した指導は評価できるものとなっている。 観点別評価の③『主体的に学習に取り組む態度』の評価は『粘り強い学習とへの取り組み』と『生徒が自ら学習計画を作成しそれに基づき学習を進めていく』という両面を評価対象とする一方、各教科・科目の指導教員が、生徒の特性にの実態を鑑み行っている。	・音楽の学習で不可欠とされているソルフェージュ(聴音・新曲視聴)力の養成には、グレード別授業の形態は、指導と生徒のその学習の習得状態から生徒個々の度合いに違いはあるものの成果は認められている。 『楽典』に於いては、理論的に組み立てて理解を積み上げていくという科目の特性があるため、生徒は反復学習によって楽典の知識は増えているものの、それを応用して次にすすむ思考力・判断力が必要とされる領域では、『基礎学力(特に、数学的思考)がどれほど定着させるか』に起因するが認められる。ここで、普通教科(数学)との関連性も考慮し、更なる工夫をした指導を検討することとする 来年度は全学年で新カリキュラムによる学習実施される為、今年度までの諸指導方針、指導内容、その学習効果等をPDCAによって、生徒の学習状況、指導方法を調整して、『観点別評価』が『新しい学力観』による評定へと結び付けられることを目標とする。	A	・音楽理論の中の『楽典』は音楽教育に於いては基礎力の養成は不可欠である為、三年間『音楽理論』の授業で、継続して指導していくこととする。 高大連携接続の方針から高校での学習目次大学進学後の学習がより円滑に継続できるよう、再度生徒の学習状況の推移を検討していく必要がある。 新学習指導要領での学習が全学年スタートした現在、今後の学習の方向性として、③の主体的に学習に取り組む態度の育成の要素を普通教科科目のみならず音楽科目への取り入れ方の工夫を検討していくこととする。 但し、音楽科に於ける、『専攻実技の評価』に関しては、『試験での各生徒の専攻実技の演奏スキル、表現力』が、その生徒の評価の全てであるという考え方が、『音楽芸術という特性から』考えられ、『観点別評価』への理解・解釈の難しさがある。 ・学習指導要領に基づき、必修の普通教科・科目の履修・修得は、音楽科の専門教科・科目の履修・修得の前提となるので、それらの学習のペースとなる基礎学力の定着と充実させる方は、来年度は1,2年生で実施されるので、新設科目も更に加わってくる為、再度、新学習指導要領の指針と照らし合わせながら、更なる指導の調整・検討を進めていく事とする。
	○普通教科、及び、音楽教科における基礎学力の定着と充実 ①普通教科の中では、特に、国語、数学、英語の基礎学力の定着と充実は、教育課程全般の履修・修得の不可欠なものであり、新学習指導要領が施行されて数年経過した現在、各教科・科目の指導目標の達成状況及び指導方法の見直しを行っている。②音楽教科においては、音楽の基本であるソルフェージュと音楽理論の中で特に楽典の指導は、それぞれの教科の特性を生かした指導を図る。ソルフェージュ(聴音、新曲)はグレード別の授業を実施し、生徒それぞれの学力の向上を目指す。音楽理論の中で、一年次履修の楽典に関しては、二年次の和声、三年次の楽式の授業の中で継続した指導を実施し、基礎理論の継続した学習を図る。 教科・科目全般の指導に於いては、いかに生徒たちに興味を持たせ、分り易く、理解しやすく、教科で習得した内容を運用できるようにするか〜新指導要領の目標を鑑み、授業の工夫が不可欠である。	基礎学力(英語・数学・国語)の定着が十分でないケースが見受けられる。 新学習指導要領(中学校)では、旧学習指導内容と比較して、3年間で学び、習得すべき学習内容に幅と深さが増え、より充実した学びがいろいろな角度から、各教科の特性を踏まえ出来るように工夫されている。しかし、その結果として、生徒に過重負担を与えてしまっている可能性がある。特に、学力差が生じやすい『主要3教科』に於いては、顕著にその様子が表れており、その対策は必要不可欠である。音楽科受験生は、中学校での学習に加えて、音楽科受験の為の専攻実技の試験が課せられるので、その準備に相当の時間が費やされる。そこで、本校では、これらの教科の指導に当たっては、特に一年次では、『中学校での学習内容の復習』を取り入れたり、その内容がどの程度理解され、学力として定着しているかを確認しながら、『高等学校での学習内容』を指導していく事としている。	基礎学力(国語・数学・英語)を定着させるためには、各教科ともに『分りやすい授業展開』を工夫することから始めると、ポイントとする。 ①まず、各授業でのテーマを明確に生徒に提示し、それを具体的な例を示しかみ砕いて、段階を追って説明していく。その際、生徒との質疑応答により理解度を確認しながら授業を展開していく。学力差が大きな教科である場合、ボトムアップのみに偏らず、高い学力の生徒に対しては、更なる学力の向上を図るための『課題・問題』の提示策にも十分に配慮する必要がある。更に②適宜、各単元ごとに小テスト、課題を課し、理解度の再確認を行っていく。③各学期の評価に当たっては、『主体的な学習へ取り組み方の把握をする為』の『課題・レポート』を適宜、必要に応じて課すこととする。	・基礎学力の定着に関しては、『反復学習』により効果が認められた。 ①国語の『漢字』の学習の指導『漢字ワーク』の定期的な宿題とその提出。次に、その宿題の範囲の『漢字テスト』の実施。テストでは合格基準を設定し、基準以下のものには、再度同じ範囲の『漢字テスト』を課す。 ②英語では、各学期適宜、教科書以外の教材の使用した指導の実施。 1『RapidReading』:平易で、ある分量のある英文を、限られた時間内に読み、その内容が理解できているかの確認。 2その授業時間内にプリント1枚を使い、生徒との英語での質疑応答を通して内容の理解を深める。又、Paragrahごとの内容を生徒に英語で説明させ、更に文章全体で筆者が何を伝えたいかのKey Wordを見つけさせる。このタイプの学習を繰り返すことで、短時間での英文解釈のスキルの向上が認められる。限られた授業時間内で、どれだけの時間を確保できるかが課題となっている。	・今年度に於ける、本校の新教育課程の実施状況と結果を振り返ると、『国語力』の基礎の定着と充実が学習指導の『重要な鍵の一つ』となっている感じられる。ここで『国語力』に関して、 ①高校入学までに、日本語を正確に『読む』『書く』『聞く』『話す』という4つの基本的な言語活動能力が十分習得されてこなかった為、普通教科・科目だけでなく音楽科での専門科目・科目の学習に支障をきたしている状況がある。 ②対応策の一つとして、リクルート：スタディサプリを活用して、高校以前の学習(国語だけでなく数学・英語も)の定着状況がどうか生徒と教員の両者で個々の学習とその結果を把握しつつ、また完全に習得していない部分の補強しつつ、高等学校の学習を進めていくこととする。この方法は、生徒の学習習慣を身に着け、僅かな細切りの時間の有効活用を身に着けさせる効果も期待できる。	A	・今年度には、本校の新教育課程の実施状況と結果を振り返ると、『国語力』の基礎の定着と充実が学習指導の『重要な鍵の一つ』となっている感じられる。ここで『国語力』に関して、 ①高校入学までに、日本語を正確に『読む』『書く』『聞く』『話す』という4つの基本的な言語活動能力が十分習得されてこなかった為、普通教科・科目だけでなく音楽科での専門科目・科目の学習に支障をきたしている状況がある。 ②対応策の一つとして、リクルート：スタディサプリを活用して、高校以前の学習(国語だけでなく数学・英語も)の定着状況がどうか生徒と教員の両者で個々の学習とその結果を把握しつつ、また完全に習得していない部分の補強しつつ、高等学校の学習を進めていくこととする。この方法は、生徒の学習習慣を身に着け、僅かな細切りの時間の有効活用を身に着けさせる効果も期待できる。
2 生 徒 指 導	○生徒指導に於いて、PDCAサイクルを基本に年々変化する生徒の生活状況を把握しながら、それに対する方策を検討する必要がある。以下は、継続的な指導が必要な項目。 1基本的生活習慣の確立の指導 ・挨拶礼法 ・綺麗な言葉遣い 2授業規律の確立 ・時間厳守 ・下校時間の徹底 ・個人所有物の管理 ・携帯電話の規律ある使用方法 3思いやりのある人格形成	・1.基本的な生活習慣の確立 ・挨拶礼法〜生徒からの自主的な習慣としてはまだ確立されて状況である。基本的な生活習慣として確立を目指し更に継続した指導を図る。 ・綺麗な言葉遣い〜ホームルーム、全校集会等における指導と共に、日常の対教員、対生徒に対して不適切な言葉遣いがあった場合は、その都度その都度指導をし、改めさせるという地道な指導の継続が基本的な生活習慣として定着させる方策として、教員全体が同一歩調で取り組んでいく事とする。 2.授業規律の確立 ・『時間厳守の指導』は全学年・全員の遅刻0を目標とする。 ・『下校時間については、5時完全下校の徹底を図る。概ね基本的な学校での生活習慣の確立が見られ、継続した指導に取り組む。』 ・個人所有物の自己管理に関して〜生徒の個人所有物の『置き忘れ』『紛失』が目立つ現状がある。生徒の机の中・机上、個人ロッカーの整理整頓が出来ていない状況が大きな状況として見受けられる。 ・本校での携帯電話の指導：規律ある携帯電話の使用の指導をMRや全体集会で指導しているものの、完全には徹底できていない。また、メール、Line等の不適切な使用による生徒間のトラブルは減少しているが、継続的な指導は必要である。	・1『規律ある習慣』の確立が図られて来たため、『下校時間の徹底』はほぼ徹底されている。下校時間の厳守・徹底は、生徒の安全・安心を確保するために、必要不可欠な課題である為、継続した指導を行うこととした。 ・2個人所有物の自己管理の徹底を図るために、毎日放課後の校内巡視の際、HRの生徒の机の上の整理整頓の状態をチェックする必要性があった。また、HRの教室以外(移動教室)でも、個人所有物の置き忘れが増える傾向がある。今一度、生徒に対する『物の整理整頓の習慣』の再確認を促すこととする。 ・3近年、生徒指導連絡会などで、SNS等にも絡む事件事故が目立ってきている為、川越警察生活安全課の協力により『防犯講話』『薬物乱用防止教室』を計画し生徒への注意を喚起させていくことを計画した。	・1『下校時間の徹底』 生徒指導主任、担任、日直教員との連携で毎日継続して下校指導をした結果、ほぼ徹底できた。本校は音楽科であるため、クラス授業と違い、個人指導の形態である実技レッスンは時として時間的掛かり若干下校時間を過ぎて終了する場合があることによる指導の難しさもあった。 ・2『個人所有物の自己管理』 今年度の生徒指導における生徒の学校生活での規律の基本として掲げた、生徒の自己所有物の管理は、担任の日々のHRでの継続した指導の結果、改善が徐々に認められたものの、徹底できていなかった。しかし、教室内の整理整頓においては、生徒個人の認識に温度差があり改善に苦慮していた。 ・3今年も、川越警察・生活安全課の基に、『防犯講話』『薬物乱用防止』教室を実施。具体例を挙げての講話は、①登下校時の安全確保、②薬物の危険性に対して、生徒達に注意を喚起であった。川越警察・生活安全課による講話は今後も継続していくこととする。	・1基本的な生活習慣の中での『下校時間の厳守』には学校として総力を挙げて、基本的な学校生活の規律の一つとして取り組んできた。結果として、指導と生徒の意識に改善が認められた状態であり、生徒下校時の安全確保から継続した指導を実施していくこととする。 ・2『個人所有物の自己管理』については、帰宅時の整理整頓徹底ができておらず、継続して指導していくこととする。 ・3『防犯講話』『薬物乱用防止教室』は事件や事故を回避する為の注意喚起に役立っている。更に、『携帯電話の、SNS等』での問題も時々見受けられる為これからも継続して指導していくこととする。	B	・1『時間厳守』 現実の社会生活を送る上で生活習慣の基本で根幹となるものである為、継続して根気よく指導していくことが不可欠である。 ・2『教室内の整理整頓』 個人の生活習慣のみならず、クラスの『学習環境』に大きく影響する為、来年度も継続指導の必要性が認められる。 ・3『携帯電話の指導』 『携帯電話安全教室』の開催を計画。SNSの使い方が日々変化している現状の中で、生徒間の誹謗・中傷の原因となる可能性が大きく、生徒の安全・安心な学校生活を確保するため、更なる細部に渡る指導の必要性がある。
	○高大連携接続という7年間の音楽を核とした一貫教育システムの実施により、音楽芸術の探究を目指す。附属高校生に系列大学の『具体的な教育内容とその目的』『大学卒業後のキャリア支援の方策と現状』を入学広報企画室との連携で進めていく。	高大連携接続(音楽を通して7年間の一貫教育)の教育指導計画とその具体例を、今年度は『附属高校生とその保護者(1〜3年)』に焦点を合わせたプログラムを広報入試センターが大学と高校とでその内容・開催時期を協議し、『本学園における音楽を軸とした高大連携接続教育の実践』を附属高校生と保護者に提示することとした。	・『本学園における音楽を軸にした高大連携接続教育の実践(附属高校生とその保護者(1〜3年)を対象とした大学に関する企画)は、“スペシャルオープンキャンパス”という名称で、5月23日(日)に開催することになった。 内容は、①大学の各専攻の紹介、②ウィリアムズ・短期留学研修の具体的な説明、③レクチャーコンサート、④キャリア支援センターより(キャリア支援教育と卒業生の具体的な就職状況)とする。	・“スペシャルオープンキャンパス”(5月19日(日)開催) ①大学の各専攻の教育方針・教育目標の紹介と具体的な各専攻カリキュラムの内容を3学年の生徒、保護者の参加は勿論、1、2年生の生徒、保護者に説明した。また、大学卒業後のキャリアとの結びつきについても、具体的に卒業生から話を聞ける場面も設定した。 ②附属高校生には大学進学の際の専攻の検討と大学卒業後の進路を幅広い視点で考えることができる良い機会となっていた。大学に於ける、各専攻での具体的な教育内容を実際に大学教員から指導をうけることによって、その内容・目的を深く理解できたのは勿論、進路選択にとっても効果的であった。 ③保護者にとっても、音大卒業後、学生がどのように社会と関わっていく可能性があるか、キャリアの具体的な状況を知る良い機会となった。	・今回の“スペシャルオープンキャンパス”(5月19日(日)開催)では、詳細に渡って、事前の打ち合わせも、入試広報センターと高校とで出来たもので、附属高校生とその保護者にとってはとても分かりやすいものとなっていた。その結果、将来のキャリアとの結び付きを検討しつつ、生徒本人にとってよりよい進路決定を促していく良い機会となっていた。	A	・本学園の大学での『音楽教育、音楽芸術の向けての探究研究の方向性』を附属高校生が認識できるように、更に創意工夫を凝らした来年度の“スペシャルオープンキャンパス”の企画と効果的な開催時期を、広報入試企画室と共に検討していくこととする。
4 演 奏 活 動 ・ ボ ラ ン テ ィ ア 活 動	○『音楽芸術への実践的な取り組み』 ・学内演奏活動 ・学外の演奏会活動 “秩父晩鐘”(オペラ彩)(12月17日(土)、18日(日):サンアゼリア)	・新入生歓迎演奏会(4月20日) 東邦第二コンサート(6月18日) 合唱コンクール(6月22日) ・定期演奏会(ソロの部)(7月13日) 東邦ミュージックフェスティバル(10月5日、6日) 定期演奏会・ウィンドオーケストラ(ウエスト川越)(12月14日) 定期演奏会(合唱の部)(11月16日) 定期演奏会(オーケストラの部)(11月24日) 以上が、今年度開催予定の演奏会だが、安全・安心を第一に適宜検討の後、開催を決定する。	・学内外演奏会に出演する候補者については開催を前提に選出していく。 オペラ彩『こもり』の練習は、例年、8月より土曜日、日曜日に中心に稽古が始まり、全体の稽古以外に第二高校の専攻専攻の専任教諭が放課後等、学内で合唱(基礎練習)の指導をし、それを全体練習に生かせるようになる。	・新入生歓迎演奏会(4月20日) 東邦第二コンサート(6月6日) 合唱コンクール(6月19日) 定期演奏会(ソロの部)(7月11日) 東邦ミュージックフェスティバル(10月10日)までは、開催実施済みの演奏会と現時点で、これから開催が決定している演奏会である。 今年度のオペラ公演『こもり』の練習日程は検討中である。	・定期演奏会・ウィンドオーケストラ(ウエスト川越)(11月14日) 定期演奏会(合唱の部)(11月16日) 定期演奏会(オーケストラの部)(11月14日) は予定通り開催することと決定した。 オペラ彩『こもり』の開催(12月7日、7・8日)が決定する。参加生徒は声楽専攻生を中心とした13名が決定。早速、計画も決まり、強行軍のスケジュールであるものの参加する生徒たちには意欲的に取り組む姿勢が見える。	A	・今年予定していた、定期演奏会は予定通りすべて実施することができた。 オペラ彩『こもり』も開催決定までに時間がかかり準備に苦戦したものの、オペラ全体として、本校生徒の合唱も準備が間に合い、オケ合わせ、立ち稽古と順調に進み、本番2日間とも多くの観客が来場し成功裡に終わった。 舞台芸術は、音楽科の生徒達にはこの上ない魅力であり、日常の学習では味わえない貴重な体験を得られるチャンスである。他の学校行事とのバランスを考慮しながら前向きに生徒の参加を検討していくこととする。
	○ボランティア活動とその具体化について 地域病院、施設を注意にボランティア演奏を続けてきたが、感染症(インフルエンザ、新型コロナウイルス)の影響が心配された時期からは、開催地との綿密な計画を立て、その実施には慎重な対応を検討することとする。	・今年度のボランティア演奏会の実施に関して。 南古谷病院でのミニコンサート【未定】 東部ふれあいセンターでのミニコンサート【未定】 常津三教病院でのミニコンサート【未定】	・新型コロナウイルス感染症の発症・流行以来、ボランティア演奏会の実施の可能性を状況が継続した。 演奏形態・演奏曲目・演奏者の選考は、具体的に演奏会の見通しがついた段階で、早めに検討し諸準備を始めることとした。	・学校行事全体の中で『ボランティア活動の在り方』を見直し・検討を行っている(生徒会を中心に)	・新型コロナウイルス感染症からの影響を回避するため今年度の下記のボランティア演奏会の実施は全て中止が決定した。 南古谷病院でのミニコンサート 東部ふれあいセンターでのミニコンサート 常津三教病院でのミニコンサート	A	・生徒会を中心に、ボランティア活動は『演奏会』のみに限定せず、様々な形態の活動を検討し、地域貢献への積極的かつ意欲的な活動となるように努力していく。
	○地域との交流と連携の大切さを生徒たちに認識させ、その具体的方策を検討する。 南古谷ニューイヤーコンサートへの参加計画を検討する。	・南古谷ウィンドオーケストラの活動：通常は、毎週土曜日午後、近隣の中学生、高校生、一般社会人と本校のウィンドオーケストラから有志がメンバーとして参加して、地域吹奏楽団体として活動してきた。諸般の事情により、その運営が難しく中止することとなった。 南古谷ニューイヤーコンサート(南古谷地区の小・中・高等学校、また地域住民との活動)：1月の第一週の日曜日に地域連携活動の一貫とし開催している。(コロナの件閉鎖)	・ニューイヤーコンサートin南古谷は、第二高校ウィンドオーケストラと本校の『合唱団』による参加することを計画している。	・南古谷ウィンドオーケストラの中止となつた今、ニューイヤーコンサートin南古谷への積極的な参加することにより、地域との連携により『地域音楽芸術』に対する意識の向上に努力することとした。	・ニューイヤーコンサートin南古谷は、地域からの参加団体も増え、更なる充実が図られている。同時に、これに参加する本校生徒たちには、地域貢献の意義をより層理解させる良い機会となっている。	・『ニューイヤーコンサートin南古谷』は、その規模と内容を検討しつつ開催することができた。『地域に根ざした音楽』の意識の向上を目指した活動であるニューイヤーコンサートin南古谷へは、次年度も『ウィンドオーケストラ』『合唱』での参加を計画していくこととする。	
	○埼玉県近郊の『音楽系高等学校』との合同演奏会の実施。 各学校の教育方針に基づいた専攻実技の指導を基に、生徒たちが一人ひとりが楽曲を解釈し、それを演奏を通して発表する『演奏会』は、ともに音楽を学び合う高校校生達にとって、良い研修の場となっている。	・音楽教育の活性化を図る為、近隣の音楽系高等学校が参加して、『第14回北関東甲信越音楽系高等学校合同演奏会』を6月8日(土)開催予定となっている。(東邦第二高等学校主催) 参加校予定校へは『第14回北関東甲信越音楽系高等学校合同演奏会』の要領を郵送し、今年度の各校の参加者の選考等の依頼をした。	・『第14回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』：6月8日土曜日実施開催に当たり、参加校の確認、更に演奏形態、演奏曲目、演奏時間の確認を各学校と連絡を取りつつ、開催の準備を始めた。	・『第14回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』 本校音楽科へ各校の代表演奏者による演奏会を開催した。 この演奏会の意義と参加校の拡大、演奏形態の見直しなどを今後も継続して検討していくこととした。	・『音楽系高等学校間の親睦を図る』この演奏会は、各学校の音楽教育へ姿勢と生徒達たちの専攻実技への取り組み姿勢がその演奏技術と表現力となり観客に伝わっていた。より良い演奏会の形態と幅広い参加校の拡大を目標に開催の準備を進めていくこととする。	・『第15回北関東甲信越音楽系高等学校演奏会』に関しては、県内音楽系高等学校との交流を図りつつ、生徒達の演奏技術と音楽性の向上を目指すし、更により良い演奏会を計画していくこととする。	

※学校関係者評価は、最終年度の評価機関を通じて、学校自己評価報告書提出と併せて受け付け日とする。(実施日を令和7年3月17日)
学校関係者：4名

学校関係者 評価
学校関係者からの意見・要望・評価等
○高い評価を受けている項目 1 学校経営全般：学校は、大学での教育を視野に入れながら、音楽芸術探究を目標とした、一貫教育の推進に取り組んでいる。実践に取り組んでいる。同時に、教育方針に基づいたOne to Oneの教育を実施している。 2 教育課程全般：カリキュラムは音楽専門教科・科目と普通教科科目がバランス良く習得できるようになっている。また、実技の指導に於いて、計画的に、個の特性・能力に応じたきめの細かい指導が実施されている。更に、クラスコンサート、東邦第二コンサートでは、技能のみならず、一人ひとりの興味・関心に応じ、主体的な取り組みができ、自主的な学びの機会が得られる。 3 生徒指導全般：学校は生徒理解に努め、適宜、適切に教育相談を行っている。 ○学校として次年度に向けた対応策 1学習指導面に於いては、全ての学習(音楽教科・普通教科の学習)の基礎となる『基礎学力』の更なる定着と充実を図ることに努める。 2生徒指導面では、学校生活において不可欠な『基本的な生活習慣の確立』の指導の徹底を目標とする。 ○改善要望項目 1学校は、更なる学校規律の確立に努め、より適切な生徒指導を実施して欲しい。 2定期試験(中間試験・期末試験)は準備期間を考慮して年間行事予定に組み入れて欲しい。 3演奏会が多く、生徒たちの目標に向けての取り組み姿勢が前向きな一方、日常の専攻実技の練習時間が制約されてしまふ。年間行事計画の組み立て方を検討して頂きたい。